

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名	吹田隆徳
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第 1 1 1 号
学位授与の日付	2021(令和3年)年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条1項
学 位 論 文 題 目	般舟三昧經「行品」の研究
論 文 審 査 委 員	主査 松田 和信（佛教大学教授） 副査 山極 伸之（佛教大学教授） 副査 佐々木 閑（花園大学教授）

### 〔1〕論文の概要

吹田隆徳氏の学位請求論文は、インドにおいて最初期に成立した大乘經典類の中で重要な位置を占める『般舟三昧經』を取り上げ、先行研究を踏まえて、漢訳とチベット語訳を精密に読解し、經典の本文を分析して、それから思想的に何が言えるかを明らかにした文献学的研究である。特に『般舟三昧經』の第2章「行品」の分析を通して、阿弥陀仏の臨終見仏との関係も含む「般舟三昧」の原初的様相を明らかにし、最初期の大乘經典にあらわれる思想が、どのような立場にある者たちによって、いかなる要請に応えるべく提唱されたのかを追求して『般舟三昧經』成立当時のインドにおける大乘仏教の実態を描き出した。本論文の内容構成と各章の概要は以下の通りである。

#### 第一章 序論

- 第一節 般舟三昧經
- 第二節 般舟三昧經梗概
- 第三節 般舟三昧經原形論
- 第四節 研究の目的と方法

#### 第二章 般舟三昧の系譜

- 第一節 赤沼・ハリソン説の再検討
- 第二節 臨終見仏
- 第三節 臨終見仏と般舟三昧
- 第四節 八千頌に見る批判

#### 第三章 般舟三昧の役割

- 第一節 視覚化の手順
- 第二節 仏像がない環境の想定

第三節	般舟三昧から仏随念へ
第四節	修道論上の位置づけ
第四章	不可解な三昧の説明
第一節	項目列举型の説明
第二節	經典解釈論
第三節	阿毘達磨論師の解説
第四節	不可解な説明の目的
第五節	首楞嚴三昧經
第五章	結論
付録A	般舟三昧經「行品」の和訳
付録B	般舟三昧經「行品」の諸本対照

〔第一章〕『般舟三昧經』は先行研究において原初形態が想定され、思想の本来的な姿を論じる土台が整えられている。また、支婁迦讖による漢訳（西暦 179 年）が存在することから、少なくとも紀元 2 世紀に遡るインド仏教の情報を取り扱うことができる。第 1 章では『般舟三昧經』の先行研究を紹介して、まず經典全体の梗概と各章の要約を提示する。続いて、先行研究に提示された『般舟三昧經』の原形論を概観して、本研究の具体的な目的と方法を序論として述べる。

〔第二章〕系譜と役割から般舟三昧の原初的様相を考察する。般舟三昧は先行研究において仏随念の発展形とみられているが、般舟三昧を論じる上で、重要視されてきた仏随念の記述は阿彌陀仏が三昧中の菩薩に対して往生の方法を説明したものであって、般舟三昧を説いたものではない。また、『般舟三昧經』の中で「般舟三昧とは何か」が説明される際には、必ず仏に対する「作意」が説かれ、仏に対する「随念」は説かれない。従って、般舟三昧の系譜を辿るには「随念」ではなく、「作意」の語に注目すべきである。これにより浄土經典類に見る臨終見仏との関連が明らかとなる。臨終見仏は『無量寿經』等における主要な見仏形態として説かれるが、仏に対する「作意」という点で両者は共通しており、臨終時といっても、般舟三昧と同じ現世見仏であり、見仏の時間帯を除いて同じ構造で説かれており、明らかに両者に共通性が見られる。次に、二つの見仏形態の先後関係を検討する。先行研究においては、般舟三昧を臨終時にまで発展させたものが臨終見仏であるとみなすが、これは本經が他の浄土經典に先行するという訳経史的な観点を反映したものであり、論拠としては乏しい。発展という観点よりすれば、逆に臨終時から平常時へと展開したと見ることも可能であり、最終的に般舟三昧が臨終見仏の発展形であるとする。

〔第三章〕禅觀經典類を参照して般舟三昧が担っていた本来の役割を考察する。禅觀經典類には念仏觀として仏を視覚化する手順が規定されている、そこに見られる念仏觀の規定では、最初に仏像を見に行くことを通して仏の特徴を記憶し、後にそれと同じイメージを想起するという手順が規定されている。この手順は伝統的な不浄觀においても同様であり、人や物を思い浮か

べるような一般的レベルの話にも当てはめることができる。視覚化を行うためには先立つ記憶がなければならぬ。念仏観において、最初に仏像を見に行くことが規定されるのもこれによる。般舟三昧が登場した当時、仏像の存在しない環境を想定した場合には、仏の視覚化がどのように試みられたかということが問題となる。それを明らかにする上で示唆に富む記述が第二章「行品」に説かれる娼婦の譬えである。この譬えの男たちは容姿などの他者から聞いた情報に基づいて娼婦を「作意」することによって、一度も見たことのない娼婦を夢の中で見て、夢から覚めてそのイメージを想起する。これを般舟三昧に当てはめると、聞いた情報に基づいて仏を「作意」することによって、般舟三昧に入って仏を見て、三昧から出て仏のイメージを想起するという過程が考えられ、この過程をそのまま仏随念に相当させることができる。般舟三昧は仏随念に先立つ記憶を得るために、釈迦牟尼仏以外の他方仏の像を心の中に作って具象化する段階を担っており、続いて行われる仏随念の加行となっている。『般舟三昧経』において仏随念は阿弥陀仏国に往生する本行として説かれるから、般舟三昧（加行）→仏随念（本行）→往生→無上正等覺という修道論の中に般舟三昧を位置づけることができる。このような修道論が『般舟三昧経』の原初部分にしか現れないことや、この他に候補となる別な枠組みが『般舟三昧経』に見出せないことから、阿弥陀仏を随念する加行としての三昧が般舟三昧の本来的な役割であった。

〔第四章〕般舟三昧は「行品」において二度現れる。ひとつは本論文で分析した「作意」などの実践に必要な内容を説くものであるが、もうひとつは「般舟三昧とは何か・・・精進を放棄しないこと、善知識に仕えること・・・云々」と項目列举の形式を取って、三昧とは直接関連のない説明を説くもので、三昧という本来の観点からは不可解な内容となっている。この種の説明は『般舟三昧経』のみならず他の大乘經典にも共通して見られるが、この問題は般舟三昧の定義という点から解決可能である。まず阿毘達磨文献を見ると、阿毘達磨では定義の成立に特定の經典解釈論を持ち出す用例が散見されるが、それと同じプロセスが般舟三昧の不可解な説明にも当てはまる可能性が認められる。さらに、般舟三昧の項目列举と全く同じ形式で説明を行う經典として『首楞嚴三昧経』を取り上げる。『首楞嚴三昧経』は大乘の三昧を説く經典でありながら、三昧の実践に必要な事項をまったく示そうとせず、『般舟三昧経』と顕著な対比をなしている。分析の結果、『首楞嚴三昧経』は三昧のもたらす力と結果という観点から首楞嚴三昧を説いていることが判明する。『首楞嚴三昧経』は大乘の三昧の力を誇示することにより衆生を大乘仏教に引き入れる目的で編纂されたと言える。『首楞嚴三昧経』と『般舟三昧経』という二つの經典の対比により大乘の三昧を説く經典に二系統が存在することが明らかとなる。本章は般舟三昧の別な側面を明らかにするために、第二、第三章に示された一連の議論とは異なるテーマを扱った章である。

〔第五章〕第二章と第三章の考察結果を般舟三昧の原初的様相としてまとめ、『般舟三昧経』本来の思想的立場に関する著者の仮説を提出し、そこに見られる大乘仏教の展開を明らかにす

る。般舟三昧は臨終見仏から発展し、往生の本行となる仏随念の加行として位置づけられるが、本来のあり方として「般舟三昧（加行）→仏随念（本行）→往生→無上正等覺」という特徴的な枠組みで説かれたものであった。このような原初的様相から見ると、『般舟三昧經』の本来的な立場は阿弥陀仏信仰にあった。これは『般舟三昧經』の基調が般若空思想にあるとする現在の定説に反するものとなるが、「行品」に説かれる「作意」の態度が『八千頌般若』では執着と呼ばれているなどの思想的矛盾を挙げながら仮説を提示する。さらに『無量寿經』などに説かれる臨終見仏が般舟三昧に先行すると見られることに注目して、『般舟三昧經』に説かれる阿弥陀信仰に見る大乘仏教の展開を明らかにする。

## 〔2〕 審査結果の要旨

初期大乘經典の中でも特異な内容を持ち、資料論的にも重要な位置を占める『般舟三昧經』について、これまでに積み重ねられてきた『般舟三昧經』をめぐる先行研究の念入りな調査に基づいて、先行研究の成果と問題点とを正確に把握・評価した上で、さらに初期大乘仏教ならびに初期大乘經典に関する近年の新たな研究成果を最大に活用しつつ、従来の定説を覆す新たな学説の提示にまで至った本論文は、大乘仏教の成立問題や、極楽世界の阿弥陀仏といった他方世界の仏陀観の展開を扱う研究者にとっても必見となるすぐれた研究成果であると言える。吹田隆徳氏は、これまでの先行研究において一定の方向性が示されてきた『般舟三昧經』の成立史に着目し、『般舟三昧經』の第2章「行品」がそれ以下の章に先行して成立した「原初的な部分」であるという研究成果に基づき、そこに示されている「般舟三昧」の内容に関連する記述を丁寧に分析することによって、「般舟三昧」がどのような修行過程によって獲得されるものであるのかを、仏陀に対する「作意」と「随念」の語法の相違によって明らかにするとともに、浄土經典における「見仏」と「般舟三昧」の関係、「般舟三昧」の目的、さらには初期大乘經典としての『般舟三昧經』の位置付けの再考などを成果として導き出している。つまり、従来の学説においては、「般舟三昧」と呼ばれる三昧は、仏陀を「随念」することで得られるとされていたが、今回の吹田氏の研究により、般舟三昧獲得の手段は随念ではなく「作意」であるということが明らかにされた。さらに、随念は般舟三昧によって認識した仏陀のイメージをあらためて思い出すという、般舟三昧より後のプロセスであるという点も明快となった。この結論は提示された資料を見る限り妥当なものと思われる。本研究によって、その意味も含めて必ずしも明確になっていなかった般舟三昧という瞑想修行とその内容に関して新たな概念規定が示されたことになり、多くの部分で説得力を持つ論文と評価できる。

『般舟三昧經』は、中央アジアから発見されたガンダーラ語とサンスクリット語のごく断片的なインド語資料を除くと、チベット訳、漢訳としてのみ現存する大乘經典文献であるが、吹田氏は、本論文における研究の基盤として、訳出年代の最も古い支婁迦讖訳『般舟三昧經』の当該「行品」の翻訳を、チベット訳、その他の漢訳とも比較しながら、付録Aとして提示して

いる。そこでの検討は、近年の古訳の漢訳經典に対して蓄積された研究成果を踏まえながら、厳密な和訳の提示に努めており、その成果が論文自体の分析や考察に十分に活用されているが、難解な古訳漢文に臆することなく現代語訳を提示しようとする意欲や手法も十分に評価に値する。ただ、本論文で提示されているのは「行品」の部分だけであり、そこが研究にとって不可欠の部分であるとはいえ、『般舟三昧經』全体を捉えるという意味では、全体について和訳を提示することが望ましかったと言える。またその際には、支婁迦讖訳だけでなく、その他の漢訳類や、後代のサンスクリット語ヴァージョンを反映しているとみなされるチベット訳との対比を行い、諸訳の対応関係を明確化することも必要であり、とりわけ諸訳の成立事情や翻訳の順序などを考えるうえで不可欠な作業となるため、この点に取り組むことが望まれる。また、「作意」や「随念」「念仏」など、一部の訳語については伝統的な漢訳仏教用語をそのまま採用している場合があり、それらの用語が本来どのような意味で用いられていたのかについては必ずしも明確にはされていない箇所もみられる。困難な要求であることは承知の上でこの点の更なる検討を望みたい。

また、吹田氏によれば、『無量寿經』等の浄土系諸經典が先に成立し、それを受けて『般舟三昧經』の「行品」が成立したという成立過程が主張されているが、もしそうならば『般舟三昧經』には先行する浄土系諸經典の影響、たとえば阿弥陀仏の誓願や極楽世界の描写などが描かれるか、あるいはそれを示唆する描写があってもおかしくないが、しかしそういった記述はほとんど現れず、作意によって般舟三昧を獲得するという構造を説くことだけが主体となっている。この点は吹田説との矛盾とも言いえることであり、今後解明すべき課題として残されている。さらに、本論文によれば、『般舟三昧經』の「行品」が成立した段階ではまだインドには仏像が誕生していなかったとされるが、「行品」の中には「常に仏の前に立つこと」が般舟三昧の条件の中に含まれている。この仏は仏像を前提としたものではないのか、この仏が阿弥陀仏だけを意味するのかどうか、仏像や阿弥陀仏の問題に関してはさらなる調査、分析が必要であろう。

さらに具体的な点を指摘すれば、漢訳の高麗本と三本の異同に関して、「高麗本から三本のかたちに増広したと見る方が自然である」としているが、そのように判断する根拠が明示されていない。両者の異同は、『般舟三昧經』の成立史解明にも大きく関連する問題であり、諸本がどのように形成・伝承されていったのかを含めて、より詳細な検討を行う必要がある。また吹田氏は末木文美士の研究を引用して「行品のみを対象として従来の研究を見直す必要性を提起する」としているが、末木の主張は「行品と四事品以下を切り離して、それぞれ別々に研究すべきである」ことを明示している。本論文では、特に「行品」を対象とし、「四事品」以下と切り離して『般舟三昧經』の原形について考察を行っているが、「四事品」以下の詳細な検討が課題として残されている。今後は「四事品」以下の内容についても検討を行い、「行品」の内容と比較しながら『般舟三昧經』全体の変遷過程について研究を進める必要がある。さら

に本論文では、見仏と来迎の関係についても考察されているが、果たして「来迎がなければ見仏もあり得ない」と言えるかどうか、吹田氏の主張は、あくまでも臨終時の「来迎」の際の見仏に限定されるように見え、来迎のない見仏もあり得るのではないであろうか。また「来迎」と「見仏」などは、仏陀の立場と衆生の立場の違いも含まれるため、見仏を臨終のみに限定する必要があるのかという問題とも併せて、今後より慎重に検討を行うべきであろう。

以上、吹田隆徳氏の学位請求論文について評価される点と課題点について述べた。今後の課題とされる点も複数認められるが、全体として本論文は、従来の研究成果を十分に踏まえて文献資料を精密に読解し、これまでの研究では明らかになっていなかった般舟三昧の具体的な成立過程とその内容を解明した優れた研究成果であるといえる。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。